

令和7年度 自己評価計画書

石川県立金沢泉丘高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備 考
1 「勉学を第一義とすること」を踏まえ、質の高い学力を育成する。 ・知的好奇心旺盛な生徒に、本質に触れる質の高い授業を提供する。また、生徒1人1台端末を効果的に活用しGIGAスクール構想を展開するなどして、生徒の主体性を高め、学びに対して自走する力を育成することで、過年度生も含めた生徒の高い進路志望の実現を図る。	① 授業において「本質に触れる指導」「生徒の主体性や対話力を向上させる指導」を目指す。そのために、「本質に触れる指導」や「学習における生徒の自走」をテーマとした研究授業を、各教科や少人数のグループ単位で行い、授業改善に取り組む。	教務課	昨年12月に実施した授業評価で、「授業が充実している」「興味関心が持てた」の質問に対する全体平均値がそれぞれ3.70、3.43で一昨年同時期3.68、3.40と比べて上昇しており、7月実施授業評価からも全体で0.01、0.03ポイント上昇している。「生徒の自走」をテーマに全教員のグループ研究が行われ、授業に還元できていることが授業の質を向上させていると推察できる。 今年度も「本質に触れる授業」に取り組みつつ「生徒の自走」をさらに促し、「主体性を高める指導法」の研究・開発を継続することで、生徒の興味関心、論理的思考力、判断力、表現力を高めたい。	【満足度指標】 生徒が「授業が充実している」「興味関心が持てた」と感じている。	「授業が充実している」「興味関心が持てた」の2つの質問に対して、以下の①から④と答えた生徒の割合を算出し、順に4、3、2、1を乗じて加えた全体平均値 α 、 β をそれぞれ算出する。 ① 「よくあてはまる」 ② 「ややあてはまる」 ③ 「あまりあてはまらない」 ④ 「全くあてはまらない」 α 、 β の値が、 A ともに3.60以上 B ともに3.50以上 C 一方のみが3.50以上 D 一方のみが3.40以上	C・Dの場合、授業改善に向けた取り組みの再検討を行う。	生徒による授業評価を実施
	② 生徒に、模試や大学入試の分析結果を提供し、大学・学部研究を深め、難関大学を志望する意欲を高める。特に、3年生には、東大・京大・医学部説明会や補習など、第1志望を貫く集団づくりを進める。また、共通テストに向け、習熟度別授業の実施や校内模試問題の研究により深い思考力の育成を進める。	進路指導課	3年生の難関10大学志望者数は、前年度2月の進路志望調査によると273名、その中で東大と京大志望者が合わせて112名である。 2年生の難関10大学志望者数も262名と、例年より多く、高い志望を維持している。	【成果指標】 東京大学・京都大学および国公立大学医学科合格者の合計人数(重複可)が増加している。	東京大学・京都大学および国公立大学医学科合格者の合計人数(重複可)が、 A 40人以上 B 30人以上 C 20人以上 D 20人未満	C・Dの場合、授業や3年間を見通した進路指導について、再検討を行う。	年度の当初に入試反省会、年間数回の志望校検討会を実施
	③ ホーム担任を中心に、年間6回以上の個別面接指導を実施し、文理選択を含め自身の進路について考えさせる。また、学習時間調査の結果も踏まえた指導により、家庭学習の定着を図る。	1 学年	生徒が新たな生活に1日も早く慣れ、学習と部活動とを両立できるような良い生活習慣、さらには基本的な学習習慣を身につけさせるべく指導を行っている。そのためにも、各面談で何を確認するのか、どのようなメッセージを生徒に伝えるのかについて担任で言葉をそろえ、目線を合わせたうえで指導していく。	【満足度指標】 1年間の学年団の指導が、生徒の学力や学習姿勢の向上に役立っている。	1年間の学年団の指導が、自分の学力や学習姿勢の向上に役立ったと考える生徒の割合が、 A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満	C・Dの場合、より効果的な個人面接指導のあり方について再検討を行う。	生徒によるアンケート調査を実施
	④ ホーム担任は、年間5回以上の個別面接指導を通して、自分を見つめさせ、高い進路志望の確立を図る。また、集会や希望者補習なども通して、自発的な学習を促す。	2 学年	1年より個人面談や学年集会等において、自分を見つけるなどの意識づけを行い、徐々に高い進路志望を持つ生徒が増えている。3年生に向け、学びに向け自走できるたくましい生徒を増やしたい。同時に、中下位層の生徒に対して、個に応じた面談や細やかな指導を通して、自信をつけるとともに、確かな学力のさらなる定着を図っていく。	【満足度指標】 1年間の学年団の指導が、生徒の学力や学習姿勢の向上に役立っている。	1年間の学年団の指導が、自分の学力や学習姿勢の向上に役立ったと考える生徒の割合が、 A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満	C・Dの場合、より効果的な個人面接指導のあり方について再検討を行う。	生徒によるアンケート調査を実施
	⑤ 本質に触れる質の高い授業を提供し、また放課後補習および個人添削指導等を通して、生徒一人一人の志望や学力にあわせた、「個に応じた指導」も展開していく。	3 学年	これまで、生徒が主体的に学びへ向かい、学習できるよう指導を行ってきた。しかしながら、スマートフォンの使用時間が多いなど、家庭学習の時間を確保できない生徒も見受けられる。今後も生徒一人一人の進路志望の実現に向けて、個別対応をはじめ、様々な視点からのアプローチを進め、さらに高い学力の向上を図っていく。	【成果指標】 難関10大学及び国公立大学医学科医学科の合格者数が多い。	難関10大学及び国公立大学医学科医学科の合格者の合計人数(重複可)が、 A 100名以上 B 90名以上 C 80名以上 D 80名未満	C・Dの場合、授業や補習、個人添削等の方法について、再検討を行う。	次年度の当初に入試反省会・検討会を実施

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備 考
2 探究活動プログラムの進化・発展及び成果の普及に努める。 ・これまで積み上げてきたSSH・SGHプログラムを進化・発展させ、2つのプログラムを融合させた新しい探究活動プログラムを全校生徒に対して実践する。加えて、その指導法を本県高等学校に波及させるとともに、あまねく県民の方に発信する。	① これまで取り組んできた自然科学的な探究活動の成果を活用し、生徒の多面的・多角的なものの見方、思考する力、行動する力など探究する力の向上を図る。特に、普通科普通コースの探究活動ではSGH推進室と連携し、文理の領域を融合させた新しい探究プログラムを確立し、その実践を図る。	SSH推進室	文科省より指定を受けたSSH認定枠指定校として、SSH事業で得られた様々な成果を県内外へ展開・普及している。現在実施している自然科学的な探究活動のプログラムは研究開発の成果である。その成果を活かし、普通科普通コースの「課題探究Ⅰ」を進化させることが必要である。普通科普通コースにおいても、SGH推進室と連携し、探究プログラムを確立させ、生徒の未来社会を見据えた多面的なものの見方・考え方の育成に取り組んでいく。	【満足度指標】 生徒が、探究活動を通じて「思考する力」「分析する力」「行動する力」「表現力」（いわゆる「探究力」）を身につけている。	学校評価アンケートにおいて、「自分自身の探究する力、思考する力、行動する力」「思考力・分析力や表現力」が高まったか。の設問に対して、「よくあてはまる」「ややあてはまる」と回答するSSH主対象生徒の割合の平均が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、計画の再検討を行う。	生徒によるアンケートを実施
	② 課題研究を軸とした探究活動プログラムの改善を図り、より文理融合を強化したカリキュラム開発を行う。また、グローバルリーダーに必要な種々の能力の育成を目標とし、その達成のために事業を展開する。	SGH推進室	5年間のSGH指定期間において確立した課題研究を軸とした探究活動プログラムを継承しながら、現在はその成果をより持続性の高いものへと発展させることを模索している。同時に、定量的・定性的根拠を重ねることを可能とする文理融合による生徒同士の学びの充実化も図っている。また、各種発表会や異文化交流行事において、他のグループの生徒や他の文化出身のゲストと問題意識を共有したり、自分の考えを丁寧に表現する機会をより多く確保していく。	【満足度指標】 生徒が、「問題意識を問いとして組み立てる力」（思考力）、「考えの異なる他者とも協働しながら物事を進める力」（協働力）、および「自分の考えを相手に論理的に表現する力」（表現力）を身につけている。	『SG探究基礎』（1年）『課題探究Ⅰ』『SG探究Ⅱ』（2年）『課題探究Ⅱ』『SG探究活用』（3年）において、グローバルリーダーに必要な思考力、協働力、表現力を身につけているかという項目で、「よくあてはまる」「ややあてはまる」とする生徒の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、内容の再検討を行う。	生徒によるアンケートを実施
3 「品位を高め、他者の人格を重んずること」を踏まえ、よりよき集団づくりをめざし、絶えず自己研鑽に努める生徒を育てる。 ・部活動・生徒会活動・学校行事等を通して、自分の考えを発信するとともに他者の考えも尊重し、集団の共通目標に向かって協働して粘り強く行動する力を育成する。 また、挨拶の励行や校内美化、様々なマナーを遵守することで周囲から応援される人づくりを推進する。	① 各種の講演会を生徒の発達段階に応じて適正に開催し、品位を高めるとともに、リーダーシップを発揮し、グローバル人材としての資質を育成する。	総務課	令和6年度の「生き方講演会」では、嘉悦大学教授高橋洋一氏をお招きし、「世界の『今』を読み解く」という演題でご講演いただいた。統計や歴史的背景などの視点を交え、生徒の興味を引きつける内容であった。その他の講演に関して生徒のニーズを十分に考慮し、講師や講演内容を慎重に検討した上で有意義なものにしていく。	【満足度指標】 講演会が、生徒にとって貴重な知識や経験を学び、生き方や価値観を考える良い機会となっている。	「講演会が知識や経験を学び、生き方を考える良い機会となっている」の項目で、「よくあてはまる」＋「ややあてはまる」の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、次年度に向け、講師の選定等を工夫する。	生徒へのアンケート調査を実施
	② 基本的生活習慣の確立を図ることを目的に、以下の挨拶指導を徹底する。 ・場面に応じた、元気で明るくさわやかな挨拶 ・職員室等の入室マナー ・授業の開始、終了の挨拶	生徒指導課	登校時や校内において、自主的に挨拶をする生徒が増えてきている。来校者や地域の方々への挨拶の奨励をはじめ、今後も挨拶の大切さや意義を伝えることにより、その姿勢を育てていく。	【成果指標】 生徒が、外部からの来校者に対してしっかりと挨拶や会釈をしている。	「私は、外部からの来校者に対してしっかりと挨拶や会釈をしている」と答えた生徒が、 A 95%以上 B 85%以上 C 75%以上 D 75%未満	C・Dの場合、HRや学年集会を通して、再度指導を行う。	生徒へのアンケート調査を実施
	③ 「いじめを絶対に許さない」学校づくりを推進するために未然防止の取り組みを行う。	生徒指導課	年間3回実施している「生活についてのアンケート調査」や担任による個別面談を通して、生徒が抱えるトラブルを早期に発見し、対応することができた。今後もいじめ問題やネットトラブルについて、研修会等を通じて教員が理解を深め、適切な対応ができる体制を確実に作っていく。	【成果指標】 互いに認め合い助け合う仲間づくりができる生徒が多い。	「他人の人格を重んじ、尊重する態度で接するとともに助け合う仲間づくりができる」と答えた生徒が、 A 98%以上 B 95%以上 C 90%以上 D 90%未満	C・Dの場合、HRや学年集会を通して、再度指導を行う。	生徒へのアンケート調査を実施
	④ 部活動等の活性化及び競技力の向上を図るとともに部活動と勉学の両立（文武両道・文武不岐）をめざす。	生徒指導課	部活動加入率は高く、意欲的に活動し、有意義であると考えている生徒が多い。運動部は総体総合成績において公立高校1位である。文化部でも多くの部が上位大会に出場し、優秀な成績を収めている。	【成果指標】 上位大会（ブロック大会以上）に進出する部活動が増える。	県予選を通過しブロック大会以上の大会・行事等に出場した部活動が、 A 21以上 B 17以上 C 13以上 D 13未満	C・Dの場合、次年度へ向け、指導方法を工夫する。	県総体・総文等の結果報告による

石川県立金沢泉丘高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備 考
4:「正義を愛し、社会から信頼されること」を踏まえ、生徒とともに開かれた学校づくりに努める。 ・授業公開など学校公開の機会の拡大を図る。とりわけ、探究活動を通して、防災をはじめとした自然科学的課題や社会課題などの解決に向け思考し、定量的・定性的根拠をもって提案する力を育成する。	⑤ 環境ISO活動を意識して、環境保全に配慮した生活となるようにする。 ゴミの分別や節水・節電に取り組む。	保健 環境課	探究活動などを通して学んだ、地球環境と調和した持続可能なライフスタイルについて、知識として深めるだけでなく、自らの生活の中で実践していくことや世界や石川県の現状についても深く追究していく姿勢を育てていく。	【満足度指標】 生徒が、環境保全を意識して生活し、実践している。	校内の環境保全活動に努めていると答え、 た生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、 取り組みの見直し・改善を検討する。	生徒へのアンケート調査を実施
	⑥ 読書推進活動と学習環境整備に努め、学校図書館としての機能と魅力を高める。 委員会活動、購入図書の精選、広報活動、教科や調べ学習の場の提供などにより、貸し出し冊数や入館者数の増加をはかる。	図書課	情報メディアの普及による読書離れの傾向は本校生徒にも及んでいると推察されるが、普段からの読書啓発・読書推進活動はもとより、授業や教科学習と連動した読書や図書館利用の一層の充実を図ることが喫緊の課題である。	【成果指標】 1年間の図書の貸出し冊数が増加している。	1年間の図書の貸し出し冊数が、 A 3,500冊以上 B 3,000冊以上 C 2,500冊以上 D 2,500冊未満	C・Dの場合、 取り組みの見直しと改善を検討する。	月毎の貸出数調査を実施
	⑦ 悩みや問題を抱える生徒の早期発見に努め、教職員間の連携を密にしながら、生徒一人一人が希望を持って学校生活を送ることができるように支援する。	教育 相談室	自分の進路に対する不安や学習面でのつまずき、人間関係の悩みによって、学校生活への意欲を失いかげたり、情緒が不安定になったりする生徒が見受けられる。	【満足度指標】 相談室を利用した生徒が、気軽に相談でき利用しやすいと感じている。	相談室を利用した生徒へのアンケート で、「気軽に相談でき利用しやすい」の項目で、「よくあてはまる」+「ややあてはまる」の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、 学年、関係各課室と連携して対策を検討する。	生徒へのアンケート調査を実施
	① 保護者懇談会、PTA活動、いしかわ教育ウィークなどを通して積極的に学校を公開し、保護者や地域住民との連携を強くし、開かれた学校づくりにめざす。	総務課	令和6年度の「PTA総会」821名、「生き方講演会」12名と動画配信による再生回数は600回を超え、教育ウィーク期間中の来校者は627名であった。今後も保護者が来校しやすく、学校をより一層理解していただけるよう内容をより充実させるとともに、周知方法を工夫していく。	【成果指標】 「PTA総会」、「いしかわ教育ウィーク期間中」の保護者・地域住民の来校合計数が増えている。	今年度の「PTA総会」、「いしかわ教育ウィーク期間中」の保護者・地域住民の来校合計数が、 A 1,500名以上 B 1,200人以上 C 900人以上 D 900人未満	C・Dの場合、 PTAと協力して広報活動に努める。	PTA総会 (5/11) いしかわ教育ウィーク (11/1～7)
	② 理数科1,2年生、普通科1,2年生及び、科学系の部所属の生徒が「金沢泉丘サイエンスグランプリ」、「創立記念祭における理科教室」等、自ら企画・運営・参加する機会を増やし、内容を充実させることで、科学教育を推進する。	SSH 推進室	毎年理数科1年生が、創立記念祭に来校した小学生等に対して理科教室を開催し、参加者から好評を得ている。また、金沢子ども科学財団と共催する金沢泉丘サイエンスグランプリやサイエンスヒルズこまつ主催のサイエンスフェスタに参加し、高校生と小中学生が協働活動することで、科学教育を推進している。今後は、活動の範囲を広げていきたい。	【満足度指標】 理科教室、金沢泉丘サイエンスグランプリおよび金沢子ども科学財団との連携プログラム、サイエンスフェスタ等SSHのプログラムへの参加者が、大変良かったと感じている。	理科教室、金沢泉丘サイエンスグランプリおよび金沢子ども科学財団との連携プログラム、サイエンスフェスタ等SSHのプログラムへの参加者が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、 次年度に向け、取り組みの改善を検討する。	参加者へのアンケート調査を実施
	③ 「学年だより」、「進路だより」「学校HP」等を通じて、保護者に学校の様子を理解していただく機会を増やし、保護者の学校行事への参加拡大につなげていく。	1学年 2学年 3学年	定期的に「学年だより」「進路だより」を発行している。12月に「学校からのたよりによって、学校の様子がわかる」と回答した保護者は85.1%であった。	【満足度指標】 学校からのたより・通信等によって、保護者が学校の様子がわかっている。	「学校からのたよりによって、学校の様子がわかる」と回答した保護者が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、 次年度に向け、内容の改善を検討する。	保護者へのアンケート調査を実施
	④ 県教委主催のフィールドワークに参加するなど、防災意識の向上や災害時の対応力の育成を図る。	総務課	昨年度、野球部員や希望する生徒が能登半島地震や豪雨災害のボランティアに参加することで、災害や生命に対する意識が高まった。今後、その意識を様々な機会を提供することで高めていく。	【満足度指標】 防災講話によって、防災への意識が高まったと感じている。	防災への意識が高まったと回答した生徒が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	C・Dの場合、 内容の再検討を行う。	生徒によるアンケートを実施

5	<p>組織運営・教職員の働き方の改善により、教育活動の効果を一層高める。</p> <p>・効率的で密度の濃い学習活動、部活動・生徒会活動の推進に努める。</p>	<p>①業務の見直しや密度の濃い会議運営など、組織運営の効率化を進め、職場環境の改善や教職員の意識改革、時間管理の工夫を図ります。これにより、教職員のワーク・ライフ・バランスを実現し、教育活動の質の向上を目指す。</p>	管理職	<p>月に2度の定時退校日、部活動休養日、夏季休業中の学校閉庁日の設定や年次休暇の積極的な取得呼びかけ、アプリを活用したアンケート集計、会議のペーパーレス化など、効率的な業務推進を通じて、教職員のワーク・ライフ・バランスを進め、その意識も高まっている。また、採点ソフトの導入やICTを活用した教材の共有や共同開発などにより、効率的で密度の濃い実践を推進している。今後も教職員の意識改革を図るとともに、時間外勤務の削減に努めていく。</p>	<p>【満足度指標】</p> <p>教職員がワーク・ライフ・バランスを実現することにより、気力、知力、体力が充実し、より効果的な教育活動が展開できている。</p>	<p>ワーク・ライフ・バランスをとることに より、気力、知力、体力が充実し、一層効果的な教育活動を展開できていると回答する教職員の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満</p>	<p>C・Dの場合、次年度に向けて、内容の改善を検討する。</p>	<p>教職員へのアンケート調査を実施</p>
---	--	--	-----	---	---	---	-----------------------------------	------------------------